



Title	中国研究集刊 総五十号記念号 玉号（第50号）編 集後記/奥付
Author(s)	
Citation	中国研究集刊. 2010, 50
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/60814">https://hdl.handle.net/11094/60814</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

昭和五十九年（一九八四）に創刊された『中国研究集刊』は、その後も着実に刊行を重ね、昭和六十三年（一九八八）以降は、原則年二冊の刊行ペースも定着した。

平成十一年（一九九九）には、大阪大学中国哲学研究室HP内に「大阪大学中国学会」のページを創設し、『中国研究集刊』のバックナンバー一覧や最近号の目次紹介など積極的な情報の提供に努めることとした。

また、平成十五年（二〇〇三）には、別冊特集号「新出土資料と中国思想史」を刊行し、以後、年二回の通常号とは別に別冊特集号を刊行する機会も多なくなった。

こうした活動に対し、平成十五年、財団法人橋本循記念会より第十三回「蘆北賞」が与えられ、本誌に対して高い評価をいたたくことができた。そしてこのたび、第五十号の刊行という大きな節目を迎えたのである。これも、ご関係各位ならびに会員諸氏のご高配のたまものと、厚く御礼を申し上げたい。

研究室ではすでに、第五十一号の編集に向けて準備を進めているが、ここで、編集事務局として考えていることを四点ほど記しておきたい。

第一は、中国学の現状と『中国研究集刊』の役割である。大学院博士課程を修了してもなかなか定職に就けないという状況は、何も今に始まつたことではないが、大学院重点化後、多くの博士を輩出しながらその行き先が充分に確保できないという現状は、学界の活性化という点で大きな問題となっている。この状況は、学部生の進路選択にも如実に反映されており、そもそも中国学を専攻する学生の数がこの数年極端に減少している。

こうした状況に際して、本学会ならびに『中国研究集刊』は何をすべきなのか。まずは、漢字・漢文の魅力を今一度積極的にアピールしていくことであろう。素朴な方法ではあるが、我々のよって立つ基盤が漢字・漢文にある以上、その魅力をわかりやすく伝えていく努力を怠ってはならない。

い。そのための活動を始めたないと考える。

第二は、そのことと関連して、特に若手研究者の活動の場を提供したい。いわゆる全国学会は権威ある学術誌を持つが、機動力に欠ける嫌いがある。一方、全国的規模ではなくとも、研究会・勉強会という名称で地道な活動をしている諸氏がいる。ただ、そうした方々の活動を支える経済的基盤はほとんどなく、雑誌の継続的刊行も難しい。そのような場合、『中国研究集刊』が一つの場を提供することはできる。本誌に掲載された論考の成果が後に立派な学術書となつて刊行された事例もある。活動の場があつてこその研究なのである。

第三は、別冊特集号の刊行である。実のところ、別冊の刊行は事務局としては大変苦しい。経費という点でも、編集の労力という点でも、想像を絶するものがある。だが、研究には、ある程度の機動性がなければならないと考える。特に、近年中国で発見され公開が進められている新出土文献については、年一回刊行の雑誌では、とうてい研究のスピードに追いつけない。新しい論考が毎日のようにインターネット上に掲載されるという時代である。少なくとも、別冊という形で、最新の研究成果をいち早く公開していく必要があろう。これまで、『中国研究集刊』では、新出土文献研究に関して四つの別冊特集号を刊行しているが、今

後も、このテーマを含め、積極的に特集を組み、学界の最前線に立つていきたいと考えている。

第四は、日本漢学の研究である。大阪大学の源流である懐徳堂については、『中国研究集刊』通常号の中でも、たびたび優れた論考が発表してきた。また、懐徳堂に限らず、広く日本漢学に関する論考・訳注なども掲載されてきた。これら日本漢学は、言わば研究領域の狭間にあり、中国哲学と日本史学、中国文学と日本文学などの境界領域に位置している。それは見方によつては、今ひとつ日の当たらない領域ということになる。だが一方、未着手のテーマにあふれた研究の宝庫であるとも言える。

偶然、『中国研究集刊』第四十九号は、懐徳堂特集号のような内容となつた。これは企画の段階で決めたのではなく、投稿された論考を編集した結果、そうなつたのである。今後も、特集が組めるような日本漢学の成果が現れることを期待したい。中国学が、単に中国古典の学なのではなく、日本の学術文化にも大きな影響を与えていることを明らかにできればと考へる。

(湯浅邦弘)

## Bulletin of Chinese Studies

---

中国研究集刊 総五十号記念号 玉号（第50号）2010年1月31日刊  
ISSN 0916-2232 大阪大学中国哲学研究室  
編輯・発行 大阪大学中国学会  
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5  
大阪大学大学院文学研究科中国哲学研究室  
電話 06-6850-6111（内線2128）  
学術刊行物指定 平成5年郵政省告示第322号

印刷・天理時報社